〈一面つづき〉

用途としては、従来の長屋門のように、大きく農作業スペースと居住スペースの2つに分けられた。農作業用のスペースとしては、農機具や作物を収納しておく倉庫や納屋としての意味合いも強い。一方、住居スペースとしては、使用人の寝泊りのための簡素なものから、親類や客人を泊めるため、床を座敷として家具や建具を設置した離れのような内装のものまで様々であった。

また、敷地内には長屋門以外にも、異なる時代に建てられた大谷石造の蔵や納屋があり、主屋と共に長屋門が農家の営みの中に存在していたということが伺える。そして中には、長屋門が敷地を巡る石塀や大谷石建物と一体化したものがあり、これは比較的加工や増築の容易な大谷石造特有である。このように、立岩地区では、農家における長屋門の様式と、大谷石の文化が融合した建築や営みがみられた。

多くの農村集落では石蔵や納屋といった大谷石建物は、石塀と共に連続した石の町並みを形成している。一方、長屋門は限られた豪農が建てることができた希少な建物であり、それゆえこうした建物の町並みの連続はみられない。しかし、その多くが本来の役割を終えてなお、誉を凝らして建てられた外観は敷地外からも伺え、この地区の景観に現在でも建築的な歴史・文化性を寄与している。

長屋門の壁面詳細(縦型目地)

敷地内に建つ大谷石建物(張石蔵)

調査を終えて

調査では、宇都宮工業高校の学生が積極的に調査を行っていたことも印象的だった。調査までに大谷石や長屋門について学び、実測結果をもとに建物の図面作成もしてくれた。当日は猛暑だったにも関わらず、疲れを見せず熱心に実測や聞き取りを行う姿を見たことで、地域住民も調査に協力してくれたのではないだろうか。お昼には、採石場にて、大谷石窯で自身で焼いたピザを食べながら研究会のメンバーと交流を行った。研究部の中には最終学年である3年生もいたが、この経験が貴重な思い出となり、卒業後も活かされることを期待している。

これまでの大谷石研究会による集落調査は、農村における石蔵や納屋といった建物とその町並みが中心であり、大谷石の産出地である立岩地区における長屋門という建築様式を調査するということは初めてであった。また、調査メンバーに新たに工業高校の学生が加わるなど、今後の研究会の活動に新たな展開を感じられる重要な調査となった。

長屋門妻面

長屋門の高さ実測の様子

「鬼怒川温泉に佇む大谷石乱張りのカフェ」

カフェ　サロン・ド・テ・オカ

メインメニューの
俵形ハンバーグ

川治温泉に向かう有料道路を右手に降りると（あさやホテル手前）、間もなく右手に大谷石乱張りしたおしゃれな店舗が目に入る。それが「カフェ サロン・ド・テ・オカ」である。福田純シェフ（71歳）が50歳で脱サラし、準備を整えてオープンしたのが17年前。

料理は抜群に美味しい。そして行き届いたおもてなしの心が、随所に感じられるのがさらに嬉しい。驚かされるのは食器である。奥様のマリエさんが20年かけて収集している、あのマイセンの数々が惜しげもなく目の前に提供されるのである。コーヒーカップのコレクションだけでも70点を超える。デザートとともに、それらのコーヒーカップに入れたての香り豊かなコーヒーが運ばれてくる。何ともマニアにはたまらない時ではなかろうか。

大谷石の壁には、三越の限定商品を多年にわたり集めた貴重なコレクションが展示されている。食の楽しみ、マイセンの楽しみ、極上の空間がここにある。ぜひ、のんびりと訪れてみて欲しい。

営　業■11:30～L.O. 14:30
　　18:30～L.O. 20:30
　　ディナーは要予約
住　所■栃木県日光市鬼怒川温泉滝525
電　話■0288-77-0657
定休日■木曜日（祝日営業）

〈研修旅行〉

安中教会と松井田周辺と高崎を巡る旅

NPO法人大谷石研究会会員　神原 浩司（かんばら設計室）

令和2年11月28日、群馬県内を巡るツアーに参加し、大谷石の事例を中心に、様々な建築物等を見学させていただきました。

まず、最初に訪れたのは高崎市美術館に併設された「旧井上房一郎邸」です。建築家アントニンレーモンドの自邸の左右反転形として有名で、現存しないレーモンド自邸に想いを馳せることができる貴重な建物です。当時のレーモンド自身の嗜好や時代背景によって使用された丸太材による架構や、開口部を構造から切り離す手法を用いた「レーモンドスタイル」、低く抑えられた軒や地面に近い床によって得られる内外の繋がり、各部のディテールや素材は、ノスタルジーだけではなく、現代の建築にも大きな影響を与えています。

高崎中心部に佇む旧井上房一郎邸とレーモンドスタイルによる内観。部分的に使われた大谷石

安中教会のシンボルの鐘塔。江守牧師によるご説明
ヴォールト天井が全体を繋げる。石垣上部に使われた大谷石

この建物での大谷石の使用箇所は水廻りの外壁部分のみですが、こういったさり気ない使い方ができるのも大谷石の魅力だと思います。

次に向かったのは安中市、まず旧安中藩武家屋敷等の見学をさせていただきました。江戸時代1800年代の建物ですが、平成5・6年度に修理復元されました。茅葺き屋根に土壁の外観、天井高さ押さえた座敷に対して、小屋組を露出させた容積の大きい土間がある等、現代の建築にも応用されている要素が数多くありました。

そして武家屋敷から徒歩で安中教会へ移動。教会の敷地を囲む石垣の上部には大谷石が使われており、下部の玉石と上部の生垣の間で形態を整え、街路の連続性を生み出すことに寄与していま[illegible]による「組積造」です。「張り石」で造られたものが多い中でたいへん貴重な建物だと思います。また、日本人の手による日本で最初のキリスト教会（F・L・ライトの帝国ホテルよりも5年早く竣工）で、そこに大谷石が採用されたという事実は宇都宮市民としては誇るべきことでしょう。外観はゴシック風で構造上の控壁を上手くデザインに活かしています。内部は特徴的なヴォールト天井、講壇の両脇には茨城県産の大理石の石柱、各素材がバランスよく使われており、絶妙な高さの2階席を含めた一体空間は、厳かながらも居心地の良いものでした。ご案内頂いた江守牧師の話では29年を要して建築され現在築101年、「愛される教会」として受け継がれています。

次に向かったのは、建築家白井晟一が設計した旧松井田町役場でした。印象的な局面のバルコニーと柱、そしてそれを両端で受ける石の壁は、水平基調の印象を与えつつ安定感のある佇まいで、高台から町全体を俯瞰するイメージでした。耐震上の問題で内部は見学できなかったこと、建物保存に関して心配なことが少し残念です。

最後に碓氷第三橋梁に立ち寄り帰路に着きました。隣県でも魅力的な空間創造のために大谷石が効果的に利用されていることを知り、実際に訪問する機会を得て有意義な時間を過ごさせていただきました。

旧松井田町役場

碓氷第三橋梁

大谷石　東西南北

横浜から船で何処へ？

（NPO法人 大谷石研究会広報担当　平沼　隆志）

横浜の図書館で見つけた古い郷土誌が大谷石に触れていた。「神奈川湊（みなと）は大谷石や房州石の集散地」だったという。

神奈川湊とは、現在の横浜ベイエリア北側の地域。江戸時代には宿場町（神奈川宿）、漁港、そして交易港として栄えた。当時は廻船問屋が並び、船で大阪など西国と関東を結ぶ流通基地の役割を果たしていた。ペリー来訪を経て南側地域が横浜港として開港されるまでは港の中心だった。

郷土誌によると、石は当時流通していた商品の中で最も重いものであり、これを運ぶ手段として船が活発に利用されていた。残念ながら、湊で扱われた石の量の記録はないそうだ。大谷石流通の実態はつかみにくい。でも、神奈川湊までどのように運ばれ、船でどこに運ばれたかを想像するだけでも楽しい。

NPO法人大谷石研究会のホームページ

http://www.ooyaishi.org/

コンテンツ盛りだくさん

大谷石研究会とは・大谷石の歴史と魅力・全国の大谷石の建造物・最近の使用例・石蔵や大谷石の活用例・大谷石の工法と保存・活動報告ブログ・会報誌

（バックナンバーがダウンロードできます）